

探鳥会スタッフ通信

2013年
8月号

「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うための通信です。

目次

◆安西英明の探鳥会講座

「私が影響を受けた方々」・・・・・・・・・・ 1

◆探鳥会のリスクマネジメント講座

「ダニが媒介する病気」・・・・・・・・・・ 3

◆探鳥会訪問記（大麻生探鳥会）・・・・・・ 5

◆探鳥会保険集計結果（2013年6月分）・・ 7

◆初心者への対応、どうしてますか？・・・・ 9

◆普及室からのお知らせ

・「大人気！ツバメのねぐら入り観察会」・・10

・「野鳥観察ハンディ図鑑改訂のポイント」・・11

・「探鳥会保険を更新しました」・・・・・・・・12

◆記事への感想お待ちしております・・・・13

◆探鳥会スタッフ通信の購読について・・13

◆誤記訂正・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

◆編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

◆安西英明の探鳥会講座

「私が影響を受けた方々」

神奈川県で自然保護や研究に取り組んでいる方々と話す機会があると、前号で紹介した故浜口哲一さんに「教わった」「世話になった」という方が少なくない。浜口さんは常に「自分のフィールドを持とう」とともに、「観察した記録を残そう、共有しよう」と説いてこられた。神奈川支部の神奈川県鳥類目録や研究年報（BINOS）などでも、軸となって尽力された。これらはとても参考になるし、問合せや取材対応でどれだけ助けられたか知れない（全国的に調べられていないことを問われても、神奈川ではこんな観察がされていると事例紹介に使えることが多い）。今回は、私自身がお世話になった故柚木修さんについて触れておきたい。



▲在りし日の柚木さん
（愛娘、つぐみさんとともに）

＜生意気だった頃＞

私は学生時代に日本野鳥の会東京支部の幹事となり、探鳥会リーダーもやっていたが、随分生意気だったように思う。自身の卒論を元に幹事会で「探鳥会マニュアルを作成すべき」と言い張った。確か、取り上げてもらえなかったと思う。当時東京支部長だった高野伸二さんが「せっかくだから安西君の話しも聞いてみよう」と応援してくれたことは覚えている。

1978年、社会学部だった私の卒論のタイトルは「環境教育の実践」。その中味は探鳥会のあり方と進め方についてで、探鳥会の役割には「自然の価値を知る」があるという観点から、課題と対策を考えたものだ。課題として探鳥会リーダーの情報交換・意見交換の不足、不特定多数の参加者への対応、ボランティアとしての限界などを指摘しつつ、参加者に正しい自然認識を培ってもらうためにはどうしたらよいかを論じた。

学生の頃は、幹事の先輩諸氏にも憤っていたように思う。月1回の幹事会に顔を出すと、鳥のよもやま話や野鳥情報の交換などで支部としての議題が後回しになることが多かったのだ。でも、その後、自分自身が会社勤めの身となると、仕事を工面しながらやっと参加できる幹事会が、杓子定規の会議ばかりでは面白くないとも思うようになった。

＜柚木さんのアドバイス＞

当時、私は東京都内で「公園めぐり探鳥会」をシリーズ化していた。手元に第13回「石神井公園探鳥会」の冊子が残っていたので、その前書きから抜粋、引用する。

都市に残る自然を訪ねて歩く、それが公園めぐり探鳥会です。公園の自然は私たちの憩いの場であるとともに、都市に生きる生きものたちの場でもあり、未来に受け継いでいかねばなりません。しかし、公園の管理はそこに生きているものたちを無視して行われています。公園に生きる野鳥たちとともに、公園の問題点も見たいと思います。

これは東京支部の探鳥会が全国各地まで出向き、珍しい種や多くの種を見ることに傾き出した一面に対するアンチテーゼでもあった。珍しい鳥に出会って嬉しいのが悪いわけではないし、多くの種を見ることは種の識別や多様性の理解に役立つが、日本野鳥の会の支部は各地にあるのだから、地元東京の自然を知る探鳥会が重要だと考えたのだ。東京支部では生意気だったゆえになかなか話を聞いてもらえず、その頃財団事務局に勤務していた柚木さんに相談に乗ってもらった。公園めぐりのねらいはよいとしても、楽しい探鳥会でなければ人が集まらないし、続かないのではないかと・・・という心配に対して柚木さんがくれたアドバイスは、身近な公園で種は多くないだろうから「どんな鳥がいるか？」より鳥たちが「何をしているか？」に注目してみたら・・・だった。

＜何してる？＞

それは植物と違って動くし、哺乳類より姿を見やすく、昆虫より行動がわかりやすいなどの点で、鳥類に適した観察ポイントだ。いつ、どこで、どんな鳥でも対象にできる。

また、種の識別を話題にすると、判る者が判らない者に教える一方通行になりがちだが、「何してる？」は多くの人の興味関心を引きやすく、その場その時そこに居合わせた者同士で共に考えるという展開にできる。その鳥の行動や習性、生活史に結び付けられるので、生命の基本、野生生物の基礎、自然の仕組みなどを解説するにもよい。何しろ自分自信の野鳥観察がより楽しくなった。それまでぼーっとしてると思っていた鳥が、実は食物を探していたり、警戒していたり・・・、いろいろなドラマが見えてきた。ちなみに40年近いバードウォッチング指導で思うのは、「何してる？」とともに興味関心を引きやすいのは生存戦略（サバイバル）と、雌雄や親子の話題である。

柚木さんは野鳥の会を退職後もフリーのナチュラリストとして活躍しながら、野鳥の調査や野鳥誌でもたびたびお世話になったが、2010年、ツシマヤマネコの保護に尽くしていた対馬で、帰らぬ人になってしまった・・・合掌。

（普及室/安西英明）

シリーズ第5回：ダニが媒介する病気

＊ダニによる被害には？

ダニによる被害としては、以前から知られているツツガムシ病や日本紅斑熱の他に、最近話題になっている SFTS(重症熱性血小板減少症候群)などが代表的なものである。

ダニのなかまは全国どこにでも生息しており、探鳥会などで被害を受けることも考えられるので、代表的な3種の病気とダニの関係について詳しく紹介する。

＊ダニとは？

まず、ダニという動物について確認しておこう。ダニは、節足動物門クモ綱ダニ目に属する動物の総称である。シラミやノミなどと同じなかまと思われがちだが、シラミやノミは昆虫で足が6本、ダニはクモ類と同じ8本だ。ただし、ダニは幼虫の時期には足が6本なので、注意が必要。

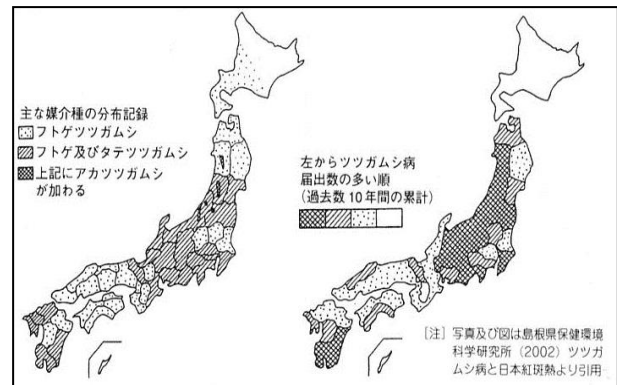
ダニは、人畜にたかって吸血するいやな生物と思われるが、吸血するのは一部の種だけであって、大部分の種は無害である。地球上のあらゆる場所に生息しており、発見された化石の地層年代から、ダニ類は3億年前にはすでに地球上に出現していたと考えられている。

■ツツガムシ病

＊ツツガムシ病とは？

ツツガムシは、野ネズミなどに寄生するダニで、ふ化したばかりの幼虫が、人やネズミなどについてリンパ液を吸う。ツツガムシ病は、ツツガムシ病リケッチアに感染したツツガムシの幼虫が、ヒトを刺すことによって皮膚感染する急性感染症である。なお、国内で媒介するツツガムシは、アカツツガムシ、フトゲツツガムシ、タテツツガムシがあり、アカツツガムシは北日本の一部に限られ、フトゲツツガムシは全国に分布し、タテツツガムシは山形県（北緯38度）から九州南部まで

分布している。



＊症状は？

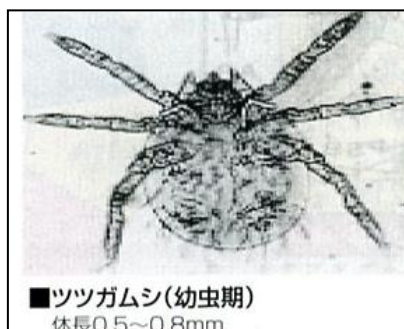
5～14日の潜伏期間の後に発症し、高熱と全身に発疹がでるのが特徴。全身倦怠、食欲不振、頭痛、悪寒などをともなって発熱し、体温は段階的に上昇し、数日で40度にも達する。また、刺された部位に近いリンパ節が腫れ、顔面や胴体部に不定形の発疹がでる。



■つつが虫病の発疹
馬原医院 馬原文彦氏 写真提供



■つつが虫の刺し口
馬原医院 馬原文彦氏 写真提供



■ツツガムシ(幼虫期)
体長0.5～0.8mm

▲ダニ類の成虫の脚は8本だが幼虫期は6本

＊対処方法は？

ツツガムシに刺されると、ツツガムシ病に感染しないまでも、数時間後から軽い発疹がみられる。また、刺された部位は、3～4日後に潰瘍（かいよう）状態になる。症状が出たら、すぐに病院に行く。なお、かゆみに対しては、市販の抗ヒスタミン剤含有のステロイド軟膏を塗る。

発生期は、秋から翌春にかけてであるので、発生期を覚えておくとよい。予防としては、発生が

集中している地域には入らないこと。やむおえず入り込むときは、長袖や長ズボンを着用し肌を露出しないこと、裾は靴下や長靴の中に入れること（登山用スパッツが有効）、靴や足下に防虫スプレーを散布しておくことなどの対策を講じよう。また、地面にはできるだけ座らないようにすること（ビニールシートを敷いていても這い上がってくる）も対策の一つだ。

■日本紅斑熱

*日本紅斑熱とは？

日本紅斑熱は、リケッチアと呼ばれる小型の細菌の一種「リケッチア・ジャポニカ」によって引き起こされる病気で、最近発病事例が多く、注意が必要だ。

このリケッチアは、野山に生息しているマダニ類に寄生しており、このリケッチアを持ったマダニが吸血のために人を刺すと、体内にリケッチアが侵入して感染する。

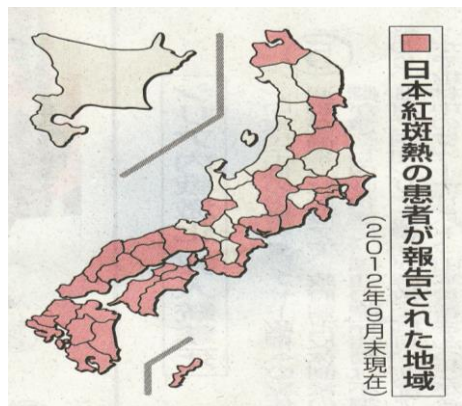


▲フタトゲチマダニ(成虫)；体調 1.8～3.0mm

*症状は？

2～10 日の潜伏期間を経て発病し、発熱が2～3 日続いた後に、頭痛、39～40 度の高熱、悪寒などの症状が急激に起こる。また、米粒大から小豆大の発疹が手足や手のひら、顔面などに現れ、全身に広がる。ただし、かゆみや痛みは伴わない。

平成23年の発生件数は159件、発生期は4～10月で、患者は全国32都道府県に及んでいる。

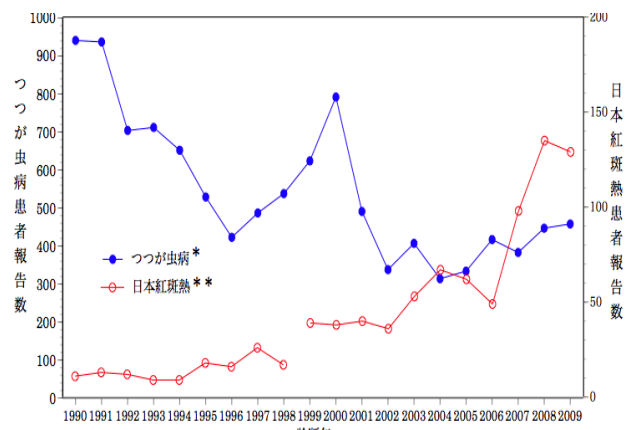


*対処方法は？

日本紅斑熱は、このところ報告例が急増してお

り、注意が必要だ。発生は、ニホンジカが生息している地域に多い傾向がある。近年、ニホンジカが全国的に増加してきており、植生破壊による生物多様性へのダメージは目に余るものがあるが、一方ではマダニによる病気の拡大にも大きく関わっているようだ。

山には入る場合にはツツガムシと同様、ダニ類対策を講じる必要がある。



■SFTS(重症熱性血小板減少症候群)

*SFTS にも注意！

平成23年に初めて特定された新しいウイルス(SFTS ウイルス)に感染することによって引き起こされる病気で、このところマスコミでも話題を集めているので、ご存じの方も多いと思う。

ウイルスを保有しているマダニのなかまに咬まれることにより感染する病気で、患者はマダニの活動期である春から秋にかけて発生している。

潜伏期間は6日～14日で、38度以上の発熱や消化器系への症状が発生する。重篤化すると死亡する。致死率は10～30%と考えられており、これまでに国内で10人を超える死亡事例が報告されている。

*マダニに咬まれたら？

マダニ類の多くは、ヒトや動物に取り付き皮膚にしっかりと口器を突き刺し、長時間(数日から、長いものは10日間以上)吸血する。咬まれたことに気がつかない場合も多いが、股や脇の下などの皮膚の軟らかな部位で吸血することが多いので、そのような場所に注意を払うとよい。

もし、咬みついているマダニを見つけたら、注意深く対処する必要がある。無理に引き抜こうとすると、マダニの一部が皮膚内に残って化膿したり、マダニの体液を逆流させてしまったりする恐れがある。取れない場合は、病院に行くこと。

また、自分で除去した場合には、個体を捨てずに保存しておこう。もしもの場合、病気の判定に役立つからだ。

(理事長/佐藤仁志)

◆探鳥会訪問記（大麻生探鳥会）

大麻生探鳥会（埼玉）

参加日時：2013年7月14日（日）8時20分～10時30分

天候：曇り

参加者：18名（男性13名、女性3名、堀本、生田）

リーダー：8名（メインリーダー1名、サブリーダー7名）

<探鳥会概要>

「日本一暑い」と言われる埼玉県熊谷市内にある大麻生は、埼玉県から東京都へ流れる荒川の中流域に位置しています。定例探鳥会が始まって約2年後の1986年、大麻生駅前に県営大麻生ゴルフ場が開場しましたが、今でも、草原や畑、林、河川敷、近隣の野鳥の森など、様々な自然環境が残されています。1年を通して色々な野鳥に出会える場所です。

大麻生定例探鳥会は、1984年に始まり現在まで29年の歴史を持っています。2012年には300回を迎え、長年に渡り多くの方に親しまれている探鳥会です。

7月～9月の夏季の間は、通常より1時間ほど早い8時20分集合で探鳥会が始まります。この日は、朝早くにも関わらず、リーダー含め26名の参加がありました。

<探鳥会の様子と観察した鳥>

巣作りに勤しむスズメや、まだ少し喉元の赤色が淡いツバメの若鳥が、早速姿を見せ、新しい命の芽吹きを感じさせます。しかし、木々が生い茂る中で、多くの野鳥はじっと暑さに耐えているのでしょう。夏は野鳥が見にくい季節だと言われます。それでもこの日は、なんのその。みなさん次々に野チョウを見つけていきます。…野チョウ…？

そう、蝶です。私たちの目の前に現れたのは、ゴマダラチョウ、アカボシゴマダラ、ツマグロヒョウモン、そして国蝶のオオムラサキ。リーダーが、

「オオムラサキはクヌギが好きなんです。埼玉では他に（武蔵丘陵）森林公園でよく見られますよ」

と、教えてください。オオムラサキ達は土手沿いの木や草の葉にとまってじっとしており、気

の済むまでじっくり観察させてくれました。ようやくチョウの元を離れると、次に現れたのはチョウトンボ。遠くの木に止まっている為、スコープに入れてもらい観察しました。まるでチョウのような深緑色の羽が美しいトンボです。それにしても、約10mも先にいる小さな昆虫を、一体どうやって発見したんだろう、と驚くばかりでした。

このように、昆虫が出る度に立ち止まり、時には図鑑と照らし合わせ、全員で熱心に観察しました。「探チョウ会だね」なんて冗談を言いながらも、様々な昆虫を見ることができ、皆さん満足そうな様子です。夏場の探鳥会にはこういった楽しみ方もあるんだなと感心しました。



▲オオムラサキ

土手を降り、ゴルフ場敷地内の道を河原方面へ歩いていくと、辺りは草原や林に変わっていきます。そこで聞こえてきたのが「トッキョキョカキョク…」という声。リーダーの方が「声は聞こえても、姿を見るのは難しい」と仰るように、この日も声だけかと思われましたが、運良く林の中に声の主、ホトトギスの姿を発見しました。独特のシルエットに胸の縞模様、黄色い足もしっかり観察できました。昆虫だけでなく夏鳥もしっかり観察でき、実りのある探鳥会となりました。

この日観察した鳥は、カイツブリ、カワウ、ダイサギ、アオサギ、カルガモ、チョウゲンボウ、キジバト、ホトトギス、コゲラ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、スズメ、ムクドリ。

ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト、ガビチョウの20種でした。



▲河原で野鳥を探す参加者

＜参加者の声＞

40歳くらいの女性：家から近くはないけれど、大麻生の探鳥会にはよく来ています。普段は家の近所でも、野鳥を見て楽しんでいます。野鳥がいることに気づくと、家の周りでも十分観察できるものですね。

50歳くらいの女性：大麻生の探鳥会にはよく参加していて、他に三室（さいたま市）の定例探鳥会にもよく行っています。少し前には渡良瀬遊水池にも野鳥を見に行ってきました。

50歳くらいの男性：探鳥会にはいつも参加しています。野鳥の他に、チョウが好きで、いつも写真を撮って楽しんでいます。

＜まとめ＞

29年前に始まった大麻生定例探鳥会ですが、現在に至るまで、周囲の環境には様々な変化があったようです。特に、ゴルフ場の開場に伴い、

それまで林で見られたキツツキ類が減り、河原の堰堤工事の影響ではササゴイやハクチョウ類、カモ類が減ったとのことです。現在、大麻生定例探鳥会では、大きく分けて3つのコースがあるそうですが、探鳥会前の下見の際に観察できそうな野鳥の目星を付け、参加者の反応、季節と天候を元にして、コースを決めているとのことでした。実際に当日は、昆虫と野鳥を楽しみながらコースを歩くことができました。

今回の参加者は皆さん常連の方でしたが、それぞれ会話を楽しまれていて、始めから終わりまで、笑顔の絶えない探鳥会でした。参加者同士で、個人的に野鳥を見に行くこともあり、探鳥会後にそのまま出かけることも多いそうです。探鳥会が、参加者同士の交流の場になっていることが伺えます。また、探鳥会が支部の方と、支部会員の方の親睦を深め、距離を縮める役割も持っているのだろうと感じました。

最後にもう1点、当日の朝、現地に着いて驚いたのが、集合場所である駅前にて支部の方が物品販売を行っていたことです。お話を聞くと、ご担当の方がご自身で机や商品等をお持ちになっているとのことで、机には図鑑や、フィールドノート、下敷きにクビラック等が並べられ、立派な販売スペースができていました。埼玉の定例探鳥会では、それぞれご担当の方が毎回このように販売を行っているそうです。私は、財団事務所の普及室 販売出版グループにて、支部の卸販売を担当しています。今回、販売物が支部を通して一般の方の手に渡り、活用されていることが実感できましたし、支部の方が実際に販売されている姿を拝見し、大変ありがたいことだと感じました。

（普及室／生田 南美子）

◆探鳥会保険集計結果（2013 年6月分）

6月は66支部からご報告をいただき、計261回の探鳥会が開催され、のべ4,766人が参加されました。

表1. 6月の探鳥会保険集計結果（2013 年7月15日現在）

支部	開催回数 (回)	参加者数		スタッフ数 (人)	合計人数 (人)
		会員(人)	非会員(人)		
小清水	-	-	-	-	-
オホーツク支部	5	81	15	5	101
根室支部	-	-	-	-	-
釧路支部	-	-	-	-	-
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	-	-	-	-	-
旭川支部	5	108	4	8	120
滝川支部	2	23	1	3	27
道北支部	-	-	-	-	-
江別支部	-	-	-	-	-
札幌支部	3	72	23	5	100
小樽支部	3	17	7	3	27
苫小牧支部	-	-	-	-	-
室蘭支部	2	27	7	4	38
函館支部	-	-	-	-	-
道南釧路	1	10	1	4	15
あおもり	-	-	-	-	-
弘前支部	3	19	3	3	25
秋田県支部	5	63	10	7	80
山形県支部	3	33	13	5	51
宮古支部	-	-	-	-	-
もりおか	2	11	18	13	42
北上支部	1	10	0	2	12
宮城県支部	8	106	11	19	136
ふくしま	2	34	0	4	38
郡山支部	3	36	0	9	45
二本松	1	5	0	1	6
白河	2	11	0	2	13
会津支部	-	-	-	-	-
奥会津連合	-	-	-	-	-
いわき支部	1	14	0	1	15
福島県相双支部	-	-	-	-	-
南相馬	1	4	12	0	16
茨城県	6	59	43	7	109
栃木	-	-	-	-	-
群馬	8	104	38	18	160
吾妻	1	7	0	1	8
埼玉	5	132	20	38	190
千葉県	6	78	30	23	131
東京	14	326	4	64	394
奥多摩支部	12	130	74	44	248
神奈川支部	7	71	20	25	116
新潟県	1	15	10	2	27
佐渡支部	-	-	-	-	-

富山	2	31	7	2	40
石川	5	60	11	11	82
福井県	1	25	10	3	38
長野支部	4	38	16	8	62
軽井沢支部	2	23	10	2	35
諏訪	2	12	30	3	45
木曽支部	-	-	-	-	-
伊那谷支部	2	12	15	4	31
甲府支部	3	50	1	4	55
富士山麓支部	1	3	9	3	15
東富士	-	-	-	-	-
沼津支部	4	53	9	7	69
南富士支部	2	46	5	3	54
南伊豆	0	0	0	0	0
静岡支部	-	-	-	-	-
遠江	7	116	26	24	166
愛知県支部	7	51	64	18	133
岐阜	-	-	-	-	-
三重	2	18	15	4	37
奈良支部	3	67	0	6	73
和歌山県支部	1	34	1	1	36
滋賀	3	25	11	6	42
京都支部	14	75	8	29	112
大阪支部	24	310	65	114	489
ひょうご	-	-	-	-	-
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	3	31	4	3	38
島根県支部	1	7	5	1	13
岡山県支部	4	89	29	14	132
広島県支部	2	19	13	2	34
山口県支部	4	19	14	5	38
香川県支部	2	64	11	3	78
徳島県支部	5	59	1	5	65
高知支部	2	9	9	2	20
愛媛	5	32	27	9	68
北九州	4	36	2	4	42
福岡支部	8	118	21	14	153
筑豊	4	16	5	4	25
筑後支部	4	13	10	4	27
佐賀県支部	4	42	5	4	51
長崎県支部	-	-	-	-	-
熊本県支部	3	37	4	4	45
大分県支部	1	8	2	1	11
宮崎県支部	2	6	10	2	18
鹿児島	1	4	0	0	4
やんばる支部	-	-	-	-	-
石垣島支部	-	-	-	-	-
西表支部	-	-	-	-	-
全国	261	3,264	849	653	4,766

備考：-は保険の申請がなかったことを示しています。

(普及室)

◆「初心者への対応、どうしてますか？」

6月号から募集しております、探鳥会における初心者対応について、東京の石亀明さま（ご担当：新浜探鳥会、Young 探鳥会（※））、落合はるなさま（ご担当：葛西臨海公園探鳥会、Young 探鳥会）からご意見をお聞きしました。本号ではその前篇をご紹介します。

※およそ40代くらいまでの方を対象とした探鳥会で、毎回多くの初参加者、初心者が参加している。

●東京 石亀明さん、落合はるなさんからのご意見

■始めが肝心：

進行の説明と集合前のコミュニケーション

一番気をつけていることは、進行をなるべく見えるようにすることです。初参加の方は探鳥会がどのように進行していくのかイメージを持っていません。『こういう順番で、こういうことをやりますよ』ということをお伝えし、安心してもらうことが第一です。

受付のときに、『初めてですか』『どこから来ましたか』とお聞きして、まず初参加者が誰なのかを把握します。そして、人数が30人前後だと初参加の方は顔を見れば大体分かるので、そういう方には『いつもどこで鳥を見ますか』『今日は何を見たいですか』と声を掛けたり、その鳥がいないときは『残念ながら今日はいないんですよ』『別の探鳥会の〇〇では見られるかもしれません』とお伝えしたり、という探鳥会が始まる前のコミュニケーションを大切にしています。また、いつも参加されている方が、初めての方に上手く話しかけてくださるととても有難いです。

私が初めて探鳥会に参加したときはまだ高校生で、知り合いもおらず、参加者は50代60代の方々ばかりで、探鳥会で誰とも話さないうで帰ることもありました。その様なときに、担当の人が『初めてですか』『今日はこのような流れで行いますよ』と話しかけてくださると『来てもいいんだな、俺』と思うことができました。

その他、昔は探鳥会には女性が少なく、女性の参加者がポツンと孤立してしまうことがありました。そのようなときは積極的に話しかけて『真ん中にどうぞ』と望遠鏡を見るようにお誘いするというのも気にかけています。

■名札の活用：

名前と顔が一致したやりとりから仲良くなる

Young 探鳥会では名札を配布しています。名札があると名前と顔が一致しますし、相手を



▲落合はるなさん（左）と石亀明さん（右）

名前と呼ぶことができます。よく顔を見るベテランの方でもなかなかお名前と顔が一致しないことが多いので、名札を付けていただけるとぐっと距離が縮まります。

ところが10年くらい前から、個人情報保護のことが厳しくなり、名札をつけてくださらなくなってきました。そのため、参加者名簿に名前を書くところを見て、『あ、〇〇さんですね』とさも知っていたかのように話しかける、という苦勞もしています。参加者が皆進んで名札を付けてくれる雰囲気になるといいな、と思いますが、時代が違う方向へ向かっているのが現実です。

要は名前と顔が一致したやりとりが仲良くなるということの始まりだと思うのです。

■お昼ご飯を食べる探鳥会：

初参加者とお話する機会を作る

お弁当タイムをはさむ探鳥会だと、隣同士で話をすることで仲良くなりやすいと思います。初参加の方はポツンと1人で座ってしまうこともあるので、そういうときは『皆で一緒に食べましょうね、孤独を好む方はお1人でも大丈夫ですが』などと言いながら、横並びになったり車座になったりしながら一緒にご飯を食べ

ることを大切にしています。特に Young 探鳥会ではお昼ご飯というのを大きく打ち出して、初参加者となるべく話すようにしています。

■初心者の班を作る：

手厚く説明

私の担当している葛西臨海公園探鳥会は、参加者 5、6 人にリーダー 1 人ぐらいの体制で行っています。最初のあいさつのときに、『初めて探鳥会に来る人』『初めて葛西に来る人』『初めて鳥を見る人』などを聞き、『そういう人は後ろの方にいてくれれば手厚く案内しますよ』

と声を掛けておきます。そして、担当は双眼鏡を 2 台くらい持っていますので、後ろに来てくれた人にお貸ししたり、また、ヒヨドリやムクドリでもきちんと観察するようにしたりと、列の前とはメニューを少し変えています。

初心者の班をつくることで、土地の説明も含め、鳥の特徴についてきめ細かに話が出来、初心者に関心を持ってもらうことが出来ます。

(次号へ続く)

(普及室/堀本理華)

◆普及室からのお知らせ

■大人気！ツバメのねぐら入り観察会■

7 月末、普及室主催初となる「ツバメのねぐら入り観察会」を行いました。このイベントは、昨年度実施したツバメの目撃情報をお寄せいただいた方々やこれまでイベントに参加いただいた方を主な対象として企画しました。また普及室ではこれまで身近な野鳥の探鳥会や講座等を実施しましたが、新しいプログラム開発の一つと捉え取り組みました。応募者数も多く、内容への満足度も高かったこの観察会。早くも次回開催を望む声が寄せられています。

今回はこの観察会の準備から当日に至るまでの様子をご報告いたします。



□どのように広報をおこなったか

最近開設いたしました普及教育グループのブログ、ツイッターをはじめ当会のフェイスブックにも情報を掲載しました。また昨年度ツバメの調査でご協力いただいた方 4000 件に、メールで情報を送信。

結果応募者数は全部で約 100 名(定員は 30 名)にも達しました。

□観察会の日時設定

関東における観察は、毎年 7 月上旬～下旬が最適。しかしねぐら入りをするヨシ原の環境の変化によっても、時期の変化はあるようです。今回の場合開催 2 週間前でもツバメの姿はほとんど見られませんでした。参加予定の方々には事前に、もしかすると多くは見られないかもというアナウンスをしました。

□観察場所の選択

ねぐら場所が見渡せるのはもちろんですが、夜間の開催のため安全面での配慮も必要でした。近くにトイレや自動販売機などがあれば、なお安心です。

今回は多摩川河川敷(府中市 四谷橋下流)で行いました。ここは一段高い場所からヨシ原を見渡すことができ、場所として最適。また人通りもあり、裏手が小学校という立地で適度な照明もありました。

□観察会の内容

集合場所の駅から観察場所までの移動時間を含み開催時間は合計 2 時間。観察会自体は 1 時間半ほどでした。

ツバメとはどんな生きものか

参加者の多くはツバメを見たことはあるけれど、どんな生活をしているか知らない方がほとんど。夕暮れのまだ明るい時間帯、講師から

写真などをみながらツバメの 1 年の行動についてお話を伺いました。このお話を聞く時間が、これからの観察に向けての気持ちを高めました。

ヨシ原を歩く

お話後はヨシ原の中を歩きました。ヨシがどれだけ背の高い植物か、どのあたりにとまって眠るのか、枯れたヨシは使わないのか、オギとの違いなど実物を見ながら確認しました。

いよいよねぐら入り

太陽の沈む速さ、雲のかかり方などでツバメがヨシに入る時間が変わってきます。当日の明るさに注意を払いながら観察地点にて準備をはじめました。周辺からだんだん集まってくる様子、集団になって上空を旋回するツバメ、次々に鳴きながらヨシ原に入りはじめる姿。肉眼でも確認できるのですが、望遠鏡や双眼鏡で見られると、参加者の満足度はさらに高まりました。

今回の観察会の参加者は、8割が野鳥観察をしたことがないという人ばかり。機材を使い慣れていないため、使い方を説明しながらサポートしました。望遠鏡をのぞくことが苦手な参加者には、カメラと連動させたパソコンの画面をお見せしました。

その他

今回は、ねぐら入りをみるということだけではなく、ねぐらとしているヨシ原の維持がいかに大変か、また貴重であるかというお話もありました。参加者からは「ダイナミックなツバメたちの姿を見るだけではなく、生活の場が危ぶ

まれているという事実を知るよい機会となった」との声をいただいています。

またツバメだけではなく、ムクドリやカラスたちのねぐらに向かう様子にも参加者は感動していました。

□観察会後のご報告

実施後のご報告を、再びブログやツイッター、フェイスブックに掲載。するとフェイスブックへの訪問者数が 2,000 人にも及びこれは歴代の記事の中でトップという結果に。一般の方にとって、これだけ多くの方が「ツバメ」に関心をお持ちであることの現れだと感じました。その後すでにねぐら入り観察会を実施されている連携団体の情報もまとめてご紹介させていただきました。

普及室には連携団体の皆様より探鳥会についてのご相談や実施後の感想などの声が多く寄せられます。中には探鳥会に新しい方があまり集まらない、特別な種類を観察できないと満足されない、などの悩みもお聞きします。このツバメのねぐら入り観察会は初心者の方も多く集まり、鳥の種類は 1 種類に関わらずダイナミックなシーンが見られる観察会だと思います。

イベントの一つとして、取り入れてみるのはいかがでしょうか。

また今回この観察会の情報を告知するにあたり、当会にメールアドレスをお伝えいただいた方々数千件に一齐にメールで告知しました。今後も初心者に届く、様々な広報手段を開発していきたいと思います。

(普及室/尾崎理恵)

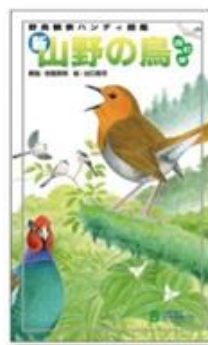
■野鳥観察ハンディ図鑑「新・山野の鳥 改訂版」「新・水辺の鳥 改訂版」■

★★★ここが変わった！ 改訂のポイント★★★

「使いやすさはそのままに、最新情報を盛り込んだ、『日本鳥類目録 改訂7版』対応版」

1、表紙を刷新——「山野」「水辺」2冊の区別がしやすい

『新・山野の鳥』『新・水辺の鳥』ともに、表紙のイラストを刷新しました。それぞれの生息環境が描かれているので、「山野」「水辺」どちらの図鑑かが区別しやすくなっています。イラストは谷口高司さんの描き下ろしです。「初めて鳥に親しむ方に喜んでいただく、手に取っていただくということが一番に考えて、美しい鳥や実際に見たくな



る鳥を描きました」(谷口さん)。

2、新しい鳥類目録に対応——ひと目でわかる目や科の変更点

全編の分類を『日本鳥類目録 改訂7版』に合わせて更新しました。『新・山野の鳥』の巻末には目録改訂で「新設された目・科」「変更のあった科」の一覧表を追加。「何がどうかわったのか」がひと目でわかります。

3、全編改訂でより新しく——最新の知見を盛り込んだ解説

新たに得られた知見などを取り入れて、全編にわたって解説を書き改め、さらに鳥を識別するポイントなどをよりわかりやすい表現にしました。

4、「放鳥された鳥、野生化した飼鳥、外来種」のページを追加

『新・水辺の鳥』では、トキ、コウノトリといった放鳥された鳥、アヒルやガチョウなど野生化した飼鳥、ガビチョウやハッカチョウなどの外来種を1ページにまとめて加えました。

5、最新の法律や条約に対応——国際希少野生動物種もわかる

『新・水辺の鳥』では外来生物法の概要について追加し、狩猟鳥の情報についても更新。また「種の保存法」による「国際希少野生動物種」にマークをつけました。

6、「カンムリウミスズメ」など、種や亜種を追加

当会が保護に取り組んできたカンムリウミスズメを、新たに種として独立して解説。これ以外にも掲載種を見直し、ムギマキ、ヤツガシラなどについて新たに図版や解説を追加、亜種でもウソのように一般的に話題になるものは解説しています。

7、フィールドマナーについて加筆

野鳥を撮影する時やエサを与える際に、保護の観点から留意していただきたい点を追記しました。

(普及室)

■探鳥会保険を更新しました■

探鳥会保険は、支部等連携団体が開催する探鳥会の参加者に対して、財団の予算でかけている保険です。1982年5月以来、「探鳥会のための障害・管理賠償保険」として始まりました。探鳥会保険の中には、二つの保険が含まれています。ひとつは参加者やリーダーがけがをした場合に、その治療費の一部を補償する「傷害保険」、もうひとつは事故が起こり連携団体や財団が賠償責任を負った場合にこれを補償する「損害賠償責任保険」です。

このたび、8月5日の保険の更新を機に、探鳥会保険の損害賠償責任保険の補償額を引き上げました。これまでの、損害賠償責任保険の補償限度額は、1事故2億5千万円でしたがこのたびの改訂で5億円まで引き上げています。これは、昨今の請求金額の高額化の流れを受けて、有事の際に当会を守るために、財団が支出してとりおこなったものです。

傷害保険の補償額は、変更はありません。

<傷害保険>

- ・死亡1名100万円
- ・入院1日1,500円
- ・通院1日1,000円

<損害賠償責任保険>

- ・1人2,000万円
- ・1事故5億円

また、これまで探鳥会保険では「探鳥会活動」だけでなく、「調査活動」についても運用の範囲で適用しておりましたが、今後は「調査活動」は保険の対象から外れることになりましたのでご注意ください。保険本来の目的である「探鳥会活動」以外の保険適用が膨らんでしまうのを防ぐことがその趣旨です。なにとぞご理解のほどをお願いいたします。

<探鳥会保険についての問い合わせ先>

(公財)日本野鳥の会 普及室
電話：03-5436-2622
e-mail：tanchi-staff@wbsj.org

◆記事への感想お待ちしております

探鳥会スタッフ通信では記事へのご意見、ご感想をお待ちしています。支部名とお名前を明記の上、tancho-staff@wbsj.org までお送りください。

また、引き続き「初心者対応」についてのご意見の他、「女性や子どもなどを対象にした対応」についてのご意見を募集します。ぜひ様々な取り組みをご紹介ください。

◆探鳥会スタッフ通信（電子メール版）の購読について

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも購読できます。（無料です）

ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記のうえ、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレス（パソコンやスマートフォンのアド

レス）を記入し、tancho-staff@wbsj.org へお申し込みください。バックナンバーとともにメール版を送信いたします。

配信を希望されない、メールアドレスの変更などについても、tancho-staff@wbsj.org までお知らせください。

◆誤記訂正

過去に発行しました探鳥会スタッフ通信において記載に誤りがありました。正しくは以下の通りです。

・「探鳥会スタッフ通信 6 月号」メール版、pdf 版（p5-6）、◆探鳥会訪問記（奥多摩支部）＜探鳥会の様子と観察した鳥＞

（誤）ホシガラス →（正）ハシブトガラス

・「探鳥会スタッフ通信 7 月号」メール版、pdf 版、紙面（p9-10）、◆「初心者の対応どうしてますか？」

（誤）林場弘征さま →（正）林庭弘征さま

（誤）神奈川県支部 →（正）神奈川支部

読者の皆さまにご迷惑をお掛けしましたこととお詫びするとともに、ここに訂正させていただきます。

★編集後記

暦の上では立秋を迎えましたが、連日暑い日が続いております。皆さま如何お過ごしでしょうか。

先日帰省した際に、日本野鳥の会栃木の方にお会いすることが出来ました。90ある日本野鳥の会の支部等連携団体。これからいろんな地域で活動されている皆さまにお会いできたらと思っています。

（普及室/堀本理華）

日本野鳥の会

探鳥会スタッフ通信 第5号

◆発行

(公財) 日本野鳥の会 2013 年 8 月 21 日

◆担当

普及室 普及教育グループ

〒141-0031

東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル

TEL : 03-5436-2622

FAX : 03-5436-2635

E-mail : tancho-staff@wbsj.org
